

スペイン語の ¿verdad?及び ¿no?と 日本語の「ね」

野 村 明 衣*

0. はじめに

スペイン語の ¿verdad?と ¿no?は、一般に付加疑問と呼ばれ、聞き手に発話内容を確認する機能を果たすと言われているが (García 2005: 91, Rodríguez Muñoz 2009: 88 等)、これらの機能の差についてはこれまで詳しく言及されてこなかった。しかし、イタリア語の付加疑問について、次のような指摘がある。スペイン語の ¿verdad?に当たる付加疑問は vero?であり、¿no?に当たるのは no?である。古浦 (1993: 29-30) の説によれば、vero?は相手に確認を要求するとし、no?は相手に注意を促しつつ、自分の言ったことを強調する機能を持つと述べている。イタリア語における付加疑問の 2 形式の機能分化が、スペイン語の場合と完全に一致しないにしても、同じロマンス語であり、語彙的意味が verdad と同じ vero (「真実」) と否定の副詞の no という 2 形式の差であることから、スペイン語の両形式にも差があるのではないかと考えてみる事ができよう。

本稿では、使用環境を均質にするためスペインのスペイン語に限り、スペイン映画 20 作品の脚本から収集した 264 例を通して ¿verdad?と ¿no?それぞれの機能を考察し、この 2 形式にはどのような差があるのかを解明する。

* 福岡大学人文学部非常勤講師

さて、¿verdad?や ¿no?は、これまでも長谷川 (2011: 152) や和佐 (2005: 20-21) によって日本語の「ね」との対応が指摘されている。たしかに、日本語において発話内容を確認する主な文法手段は終助詞の「ね」であり、多くの日本語学の研究が存在する。本稿では、スペイン語における ¿verdad?と ¿no?の機能を明らかにし、同時に、「ね」に関する豊富な論考を援用することによって、両言語における類似した機能をもつ形式の解明とその対応関係という、より大きな研究課題の一段階になることを目指している。

1. 先行研究

1.1. ¿verdad?と¿no?

¿verdad?, ¿no?に関する先行研究を見てみると、Rodríguez Muñoz (2009: 89) は、¿no?と ¿eh?を確認のための標識 (marcadores comprobativos) と呼び、次のように説明している。

El uso de ciertos marcadores comprobativos puede estar ligado al grado de compromiso o convencimiento que tiene el enunciador en relación con la información.

(Rodríguez Muñoz 2009: 89)

すなわち、marcadores comprobativosの使用は、話し手の情報への確信の度合いに関わるという。これを踏まえれば、¿verdad?と ¿no?の差は話し手の情報への確信度にあると考えることができる。

また、Ortega (1985: 243) は、一般に付加疑問と呼ばれる ¿no?を伴う文と疑問文の違いについて次のように指摘している。

(1) a. ¿Tuviste tiempo de verla?

(2)

b. Tuviste tiempo de verla, ¿no?

(Ortega 1985 : 243)

(1)aは疑問文であり、この場合話し手は質問に対する回答が sí であるか、あるいは no であるかを全く知らない状態で、聞き手は回答する義務を持つものに対して、(1)bは(1)aと比べて話し手の情報に対する確信度が高く、質問というより主張に近くなるという。このことは ¿verdad?を伴った場合においても同様だと考えられる。従って、¿verdad?や ¿no?を用いる場合は、疑問文と比べて話し手は発話内容に対してある程度の確信を持っていると言えよう。

1.2. ¿verdad?

¿verdad?についての先行研究では、¿verdad?の性質に関する言及はないが、語用論的機能に関する記述がいくつか見られる。Ortega (1985 : 247) は、肯定文に ¿verdad?を伴った場合、¿no?と置きかえ可能であり、機能は全く同じであると説明している。

(2) El correo viene a las doce. ¿verdad?

(Ortega 1985 : 247)

また、¿verdad?は否定文に現れる付加疑問であり、命令とは相容れないとも述べているが (Ortega 1985 : 247)、その具体的な理由については説明していない。

(3) No ha llegado todavía el periódico, ¿verdad?

(Ortega 1985 : 247)

さらに、¿verdad?は教養があり優雅に見せたいときに用いられるという (Ortega 1985 : 247)。また Fuentes (1985 : 183) によると、¿verdad?は文字どおりの情報交換ではなく、話し手同士が友好的な関係にあることを確認するための表現、すなわち交感的言語使用¹⁾ (función fática) としての機能も果たすという (Fuentes 1985 : 183)。

1.3. ¿no?

¿verdad?と比べて ¿no?に関する先行研究は非常に多く、そこに挙げられている ¿no?の説明は、語彙的意味から考えられる基本的性質、発話で用いられた場合の語用論的機能、¿no?が付加される文に与える影響、そして現れる位置による機能に関するものの4種に大別できる。

1.3.1. 基本的性質

Ortega (1985 : 243) や Christl (1996 : 130) は、¿no?は話し手の持つ情報に対する不確実性 (inseguridad) を表すとしている。また、話し手が聞き手に情報を確認 (corroborar) する機能を果たすという指摘もある (García 2005 : 91, Rodríguez Muñoz 2009 : 88 等)。

(4) Creo que no has captado la pregunta, ¿no?

(Ortega 1985 : 242)

1.3.2. 語用論的機能

García (2005) は、¿no?の語用論的機能を4つ挙げている。まず、聞き手に発話内容が事実であるかどうかを確認するもので、この場合 ¿no es así?, ¿no es eso cierto / verdad?に置きかえることができ、聞き手に答えを要求するという。第2に、発話内容に対する聞き手の意見を確認するもので、¿no crees?

で言いかえ可能である。この場合、話し手の意見は聞き手の判断に対して開かれているという。つまり、聞き手への確認としての ¿no?は、発話内容が事実かどうかを問うもの(第1の機能)と、発話内容に対する聞き手の意見を問うもの(第2の機能)に分けられるということである。第3に、聞き手に答えを求めない交感的言語使用としての機能、そして最後にフィラー (muletilla) としての機能で、これは話し手が次の発話を考える間の時間稼ぎとして用いられる、意味を持たないはさみ語としての使用である。

1.3.3. ¿no?が付加される文に与える影響

Ortega (1985:245) は、¿no?が付加される発話に与える影響について指摘している。命令に伴う場合には、命令の厳しさを和らげて聞き手に答えの自由を与え、依頼に付加される場合は、話し手の権威を和らげるという。

(5) ¡Ten un poco de paciencia!, ¿no?

(Ortega 1985:245)

また、主張に伴う場合に聞き手の答えを要求する (Ortega 1985:244) とも述べており、これは ¿no?が疑問形式であることによると考えられる。

(6) Te suplico encarecidamente que me entregues ese papel, ¿no?

(Ortega 1985:245)

実際に答えを要求するののかについては、後ほど考察する。

1.3.4. 現れる位置による機能

Briz (1998:227) は、¿no?が文中²⁾で現れた場合、交感的言語使用あるいは

(5)

フィラーとしての機能を果たし、話し手の発話がまだ続くことを表す、そして文末では、聞き手の答えを要求し、発話の終結、発話権の交代を表明するという。

(7) A: y al ir a salir de casa ¿no? sonó el teléfono / era Sonia y le digo
¿viene? ¿no? ↑

(Briz 1998 : 227)

このように ¿verdad? と ¿no? のそれぞれの機能に関する先行研究は見られるが、これら 2 形式の差異についてはまだ研究の余地があると思われる。

2. ¿verdad?

2.1. 実例による考察

では具体例を見てみよう。本稿では、スペイン映画 20 作品の脚本から収集したデータ 264 例³⁾ (¿verdad? 84 例、¿no? 180 例) をもとに、スペイン語母語話者 5 名を対象に行ったアンケート調査の結果を交えて考察していく⁴⁾。

(8) [A pocos metros de Julia hay un coche-ranchera aparcado con un hombre dentro joven y con aspecto bonachón. Sale del coche.]

Marc: ¡Julia, entra en el coche, que te vas a congelar!

[Julia ni siquiera se vuelve.]

Marc: Es una cabezota.

[Un coche se aproxima tocando la bocina y aparca junto a él. Es Gené.

Se baja y saluda a Marc.]

Marc: ¿Eres Gené, verdad? (Gené asiente.) Yo soy Marc.

Gené: ¿Y Julia?

[Marc indica con la mirada a Julia, que se acerca a ellos lentamente, co-

jeando sobre la muleta.]

(*Mar adentro* : 16)

(8) は、Ramón の尊厳死を訴えるため、Ramón の家にやってきた弁護士 Julia と部下の Marc が、人権保護団体の責任者である Gené と初めて会う場面である。話し手 Marc が Gené の名前を知っていることから、事前に Gené という人物が来ると聞いており、自分達以外に Ramón の家を訪ねてきたこの女性が、話聞いていた Gené であろうという確信があったので、¿no?ではなく ¿verdad?を用いたと考えられる。母語話者によるアンケートでも、¿verdad?を用いると話し手は聞き手が Gené であるという確信を持っているが、¿no?の場合は確信がないので聞き手に確かめているような印象を受けるといった回答が得られた。

では、次の例の ¿verdad?は ¿no?で代替できるだろうか。

(9) Modesto : Digame una cosa : si estaba todo tan claro, ¿por qué tardó tres días en hacer el informe?

[Santos mira Modesto con dureza.]

Santos : ¿A qué viene eso?

Modesto : Una empresa de Gibraltar llamada Kavendish le ingresó en una cuenta de Andorra treinta millones de pesetas un día antes, justo un día antes de firmarlo. Exactamente en la cuenta número 001120036...

Santos : ¡Pare!

[Santos se vuelve. Modesto deja de leer. Santos retira la sartén y apaga el fuego.

Mira el papel en manos de Modesto.]

Modesto : No fue un accidente, ¿verdad? Usted falseó el informe y cobró por ello.

(*La caja 507*:100)

(9) は、山火事で娘を失った Modesto が、火事は本当に事故だったのか、あるいは故意に起こされたものであったのかを調べ、真実を知っているであろう Santos にそれを問う場面である。事故ではなかったことを裏付ける証拠を手に入れて確信を得た Modesto は、No fue un accidente という発話に ¿verdad? を用いる。これは聞き手である Santos に対して、自分が確信を持っていることを表した上で確認を求め、真実を語るよう要求していると考えられる。この例について、母語話者に ¿verdad? を ¿no? に置きかえるとどのように意味が変わるかをたずねたところ、否定文なので ¿no? は不自然だという回答と、否定文であっても問題ないという回答が得られた。また後者の母語話者は、¿no? に置きかえると話し手の発話内容に対する自信のなさが現れ、聞き手に対して同意を求めるといふ。一方 ¿verdad? の場合には、聞き手の同意が必要ないほどに話し手が確信しているといふ。では、次の例はどうだろうか。

(10) Hombrecillo : ¿Quién más está al corriente de esto, Ramón?

Director : El redactor y yo, nadie más. He visto los nombres que aparecen en estos documentos. Me ha parecido adecuado restringir la información y consultar antes de dar un paso en cualquier dirección.

Hombrecillo : ¡Has hecho muy bien, Ramón! Aunque, podría ser un gran éxito para nuestro periódico, ¿verdad?

(*La caja 507*:126)

(10) は、会社の重役が、部下に会社の成功について述べる場面であるが、

この場合にも話し手 Hombrecillo は、部下の功績が会社にとって益となるという発話内容に対する確信を持っていると考えられる。母語話者のアンケートによると、¿verdad?によって聞き手を同意させようとする話し手の意図が感じられるという。また、¿no?に置きかえると、話し手は発話内容への確信がなく、聞き手に直接真偽を問うような印象を受けるといふ。

これらの結果をまとめると、¿verdad?は話し手が発話に対する確信度が高い場合に用いられるとすることができる。ただし、¿verdad?が ¿no?とは異なって命令には付加されない理由は確信度の高さだけでは説明できない。この点に関しては後ほど言及する。

3. ¿no?

3.1. 実例による考察

次に ¿no?についての具体例を検討しよう。(11) は、バルで食事をしていた話し手 Santa の発話である。聞き手は友人の José である。

(11) Santa : Tu mujer está de noche ahora, ¿no?

[José asiente, desconcentrado.]

(*Los lunes al sol* : 51)

Santa は、José の妻が今夜勤であるかについて、¿no?を用いて聞き手に確認している。母語話者に対するアンケートによると、この場面で話し手の確信を持っていることを表す ¿verdad?を用いると、聞き手に確認しているという点で大きく意味は変わらないが、話し手は聞き手が発話内容を肯定することを予測していることになるという。このことから、¿no?を用いた場合には話し手の確信の度合いが低いことを表明していると言えよう。

次の例は話し手と聞き手が夫婦喧嘩をしている場面の発話である。

(12) Antonio : Te he pedido perdón, ¿no? ¿Qué más quieres que haga?

Pilar : Nada, Antonio, no quiero nada.

(*Te doy mis ojos* : 150)

(12) では、話し手 Antonio が聞き手 Pilar に、以前の喧嘩について謝罪したことを確認している。話し手は謝罪したという事実を当然知っているので、確信度の高さを表す ¿verdad'を用いることもできるはずである。しかし、母語話者のアンケートによると、¿verdad?に置きかえると話し手の謝罪を認めるよう強いるニュアンスとなり、不自然だという。一方、¿no?を用いると聞き手にすでに謝罪したという事実を認めてもらいたいという含意が現れるという。これは、¿no?を選択しあえて確信度を下げることによって、聞き手の反応を確かめ、そして発話内容を認めさせることが目的であると考えられる。このように、発話内容について話し手だけでは判断できない、あるいはそのようにみなして情報を提示しようとする場合に、¿no?によって確信度の低さを示して、聞き手に情報を確認することができる。

ここまでの実例を考察した限りでは、¿verdad?と ¿no?の差は、話し手の発話内容に対する確信度の高低差であると言える。ところが、次の例を見てみよう。

(13) [Ricardo se sienta a la mesa y Lorenzo irá colocando el pan, los platos y los cubiertos.]

Lorenzo : ¿Sabes, mamá? Paquito ha dicho que nunca les dejo venir a jugar a casa...

[Elena vuelve la mirada hacia Ricardo. Se lo piensan, los dos.]

Elena : ¿Qué hacemos? Si la gente empieza a mumurar, mal asunto...

Ricardo : Que suban, ¿no? Les das de merendar y ya está.

Elena : Sí, algo así habrá que hacer.

(*Los girasoles ciegos* : 42)

(13) は内戦後、家族にかくまわれていた自由主義者 Ricardo と妻の Elena が、息子 Lorenzo の友達が家に遊びに来たいと言っていることについて話し合う場面である。この例では確信度の低い ¿no?を伴うことによって、Ortega (1985 : 245) が命令に ¿no?を伴うと、聞き手に答えの自由を与えると指摘しているように、発話に対する意見を聞き手に求めていると考えられる。母語話者に対するアンケートによると、¿no?によって聞き手と一緒に決めている印象を受けるといい、これは Ortega (1985) の ¿no?は聞き手に答えの自由を与えるという指摘とも一致している。一方、¿verdad?に置きかえるとどうなるかたずねたところ、全員が不自然という回答であった。これも、Ortega (1985 : 247) の、¿verdad?は命令文には付加されないという指摘と合致している。本稿で用いたデータでは、行為指示に ¿no?を伴う例が7例観察されており、そのうち2例⁵⁾が命令、5例が勧誘である。典型的な命令に伴う ¿no?の例が得られなかったため、これについては ¿verdad?と共に、作例をもとに次節で考察する。

4. ¿verdad?と¿no?

4.1. 行為指示に伴う¿verdad?と¿no?

ではなぜ ¿verdad?は行為指示には付加されないのに対して、¿no?は付加され、聞き手の意見を求める含意を持つことができるのだろうか。この点に関して次の肯定命令、否定命令の例にそれぞれ ¿verdad?と ¿no?を付加し、スペイン語母語話者に提示して意見を求めた。

(14) * a. Levántate, ¿verdad?

b. Levántate, ¿no?

(15) * a. No te levantes, ¿verdad?

? b. No te levantes, ¿no?

上記の4例中、肯定命令に ¿no?を伴う (14)bの例のみが自然であり、¿verdad?を伴う (14)a及び (15)aの例は共に不自然であるという。また否定命令に ¿no?を伴う (15)bは基本的には不自然であるが、起きてはいけないとわかっているはずの聞き手への非難として発話する場合には使用可能という回答が得られた。つまり、肯定命令であっても否定命令であっても ¿verdad?を付加することはできないが、¿no?とは特殊な場合も含めて付加することができることである。しかし、その理由は ¿verdad?や ¿no?の話し手の発話内容に対する確信の度合いを示すという性質からは説明できない。亀井 他 (1996: 1334)は、命令文について「現存していない行為や状態を(聞き手に)実現させようとする意図をもって発せられる文」と規定しており、これは話し手の一方的な表現であると解釈できる。話し手からの一方的な発話である命令と、それに対する確信度の表明は性質上合わないので、¿verdad?は命令には付加することができず、¿no?は可能であるという事実を、確信度の差に求めることはできないということである。したがって、今まで見てきた確信度の差という捉え方を拡張する必要がある。

4.2. 語彙的意味による¿verdad?, ¿no?の差

野村 (2015, 2016) で考察したように、スペイン語において、文末の位置に置かれる呼びかけ語は、その語彙的意味が反映される。例えば、「息子、娘」を意味する *hijo/a* と「子ども、少年」を意味する *chico/a* は、基本的に年下、あるいは同年齢の聞き手に使用される。

(16) a. Tranquilo, no te preocupes, hijo.

b. Tranquilo, no te preocupes, chico.

(野村 2015: 46-47)

hijo/a はそれが持つ語彙的意味によって、聞き手を疑似的な親子関係に置くので、優しさの意味素性を持つ。一方、chico/a は年下や同年齢の聞き手に使用される無標の呼びかけ語であり、hijo/a のような和らげ効果はなく、文脈に応じて厳しさや激励の印象を与える。

また、呼びかけ語だけでなく、聞き手に知っているかを問う ¿sabes?、理解したかを問う ¿entiendes?なども、文末に置かれるとそれぞれの語彙的意味を残し、異なったプロセスで聞き手の理解を求める。

(17) Gené: Y ahora soy yo la que va a ayudar a Ramón, ¿sabes?

(野村 2014: 140-141)

(18) Rosa: ¡Es que justamente pensé mucho sobre eso!... Sobre lo que me dijiste en Coruña... Ramón..., es que me di cuenta. Me di cuenta, ¿entiendes?

(野村 2014: 150)

¿sabes?は、聞き手に発話内容を受け入れられるものとして、また ¿entiendes?は聞き手が発話内容を受け入れ難くても受け入れるよう理解を求める。

では、主に文末で使用される ¿verdad?と ¿no?についても、その差を語彙的意味に見ることができないのではないだろうか。改めてこれらの語彙的意味に着目すると、verdad は「真実」を意味するので発話内容が真であることを前提にして問いを発していると言える。一方、否定の意味を持つ no を疑問にするとすることは、聞き手に対して否定するかを問うているので、聞き手が否定する余地を残す疑問である。すなわち、両形式の差は、程度差ではなくて質的な差である。そう考えると、命令は真であるかどうかを聞き手に問うことはで

きないので、¿verdad?は肯定と否定命令に付加することができないと説明できる。一方、¿no?は命令内容の遂行に対して否定の余地を残して、「(そういうことは) しなくていいのか?」と聞き手に問うので、命令に付加することができるのである。母語話者によると、(14)bは¿no?を伴うことによって「起きろよ」というような強調の含意を持つという。これは¿no?が「起きろ、そうじゃないのか? (起きなきゃいけないでしょう?)」という情報を付加することによって考えられる。また、Ortega (1985:245)の命令を和らげ、聞き手の意見を求めるように感じられるという指摘は、まさしくこれと通底する。(15)bも同様に解釈できるが、「起きるな」という発話はすでに否定命令であり、さらにそれを否定するかを問うと否定の繰り返しになる。そうすると聞き手にとっても分かりにくいのであまり用いられないのだろう。実際に、ある母語話者は、(15)bについて「起きてはいけないとわかっている聞き手が起き上がろうとする場面でのみ使用可能」であり、¿no?を伴うことによって「¡Que no te levantes, tío!というような非難を表す」と回答している。この含意がQue no te levantesという形式をとっていることから、母語話者は、否定命令が¿no?を伴うと、否定命令の内容をもう1度伝えるような、強調的な繰り返しと受け取っていることがわかる。(14)b、(15)bがどちらも命令内容を強調することから、これらの例では聞き手が否定する余地を与える¿no?を命令と共に用いることによって、命令内容を遂行するよう促しているのである。

そうすると、前節までで考察してきた¿verdad?と¿no?の確信度の差は、実は副次的な違いであり、その本質は¿verdad?は発話内容が真であることを前提にするもの、¿no?は聞き手に対して発話内容を否定する余地を残して問うものであると言える。真実を意味するverdadを用い、それを聞き手に問うので、結果的に確信度が高いと感じられ、noを用いて聞き手が発話を否定する余地を残して問うので、発話内容に対して自信がないように見えるのである。García (2005)は¿no?の第2の機能として、発話内容に対する聞き手の意見の確認を

挙げていたが、この機能に関する、話し手の意見は聞き手の判断に対して開かれている、という説明は、まさに ¿no?が持つ、聞き手に否定される余地を残して問う本質を表している。

このように考えると、¿no?が発話を和らげ、交感的言語使用としての用法を持つのも、発話を否定する余地を残す性質によると解釈できる。聞き手に対して否定する余地があると示すことによって、聞き手を意識していることや聞き手とのつながりを表明できるのである。次の発話は母語話者に対するアンケートで、全員が「付加してもあまり意味は変わらない」と回答した文中の位置になる例である。

- (19) Borjamari: No sé, *ossea* [*sic*], a lo mejor tengo esa época hiperidealizada, ¿sabes? Pero es que pienso, ¿no?, que a lo mejor el que se casó con Piedad podría haber sido yo.

(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo* : 38)

¿no?の先行発話 *Pero es que pienso* (でも僕は思うんだ) は、話し手が否定される余地を残して問うほどの情報量がない。この場合には、¿no?が持つその性質によって聞き手の反応を窺いながら発話していると考えられる。また母語話者によると、¿no?を ¿verdad?に置きかえると不自然という回答が多かった。これは ¿verdad?が本来発話内容が真であることを問うものなので、聞き手の反応を窺うには適さないためだと考えられる。これに対して ¿no?は、聞き手が否定する余地を残す性質によって、聞き手とのつながりを示すことができるのである。

4.3. ¿verdad?と¿no?に対する返答

ここまで見てきたように、¿verdad?で発話されると、聞き手とすれば話し手

は発話内容に関して真であると前提して発話している、すなわち主張に近いものとして知覚するであろう。一方、 $\zeta no?$ の場合は否定される余地を残して聞き手に確認するものであるからには、返答や反論の余地も $\zeta verdad?$ と比べて多いだろうことが予想される。

実際に本稿のデータでは、 $\zeta verdad?$ の後に聞き手が何らかの返答している例は、全84例中43例見られたが、このうち、約70%にあたる30例は話し手の発話に同意するものであり、残りの30%にあたる13例は話し手の発話内容を否定したり、反論するものであった。また、 $\zeta no?$ は全180例中、72例に聞き手の返答が見られたが、このうち、約42%にあたる30例は話し手の発話に同意するものであり、残りの約58%にあたる42例は反論などであった。すなわち、 $\zeta verdad?$ と $\zeta no?$ の返答が否定や反論である割合を比べると、 $\zeta verdad?$ が30%に過ぎないのに対して $\zeta no?$ は58%であり、 $\zeta no?$ の方が聞き手が発話内容に反論する割合が高いということである。このことから両者の差が、話し手が発話内容を真であることを前提にしているか、あるいは否定される余地を残しているかというものであることがわかる。

なお、 $\zeta verdad?$ を伴う84例中、聞き手の返答を求めずに話し手が発話を続ける例が約48%にあたる41例、 $\zeta no?$ の場合には180例中、約60%にあたる108例観察されている。 $\zeta verdad?$ と $\zeta no?$ はどちらも疑問形式であるのに、使用例の約半数が聞き手の返答を求めているというのは疑問文としては特異である。このことから $\zeta verdad?$ と $\zeta no?$ は、純粋な疑問文ではなく、話し手が発話内容をどのように伝達しようとしているかを表明するものであると言える。ただし、話し手の発話内容への態度の表明に聞き手が返答することもあり、それが聞き手への確認として捉えられるのだろう。従って、 $\zeta verdad?$ は発話内容が真であるかを前提にして問う話し手の姿勢を表すもの、 $\zeta no?$ は聞き手が発話内容を否定するか余地を残して問う姿勢を表すものと結論できよう。

5. ¿verdad?及び¿no?と日本語の終助詞「ね」

5.1. 日本語の終助詞「ね」

では次に、日本語の終助詞「ね」の機能を調べ、その分析を ¿verdad?と ¿no?の理解に役立てられないか検討しよう。時枝(1951:9)は、「ね」を「聞き手を同調者としての関係におこうとする主体的立場の表現」とであると記述している。これは、益岡(1991:96)が指摘しているように、「話し手の知識と聞き手の知識が基本的に一致すると判断される場合には『ね』が用いられる」ので、「ね」を付加すると聞き手もその情報を知っているものとして情報を伝達することになるためである。次の例を見てみよう。

(20) お島って変わった名ですね。

(21) お島って変わった名ですよ。

(益岡 1991:96)

(20) では、話し手は「お島が変わった名である」という知識を聞き手が共有していると判断しているのに対して、(21) では聞き手が「お島が変わった名である」という知識を所有しておらず、話し手の知識と聞き手の知識が対立していることを反映して話し手が「よ」が選択しているという。

また陳(1987:97)は、聞き手の方が発話内容に対する情報量が多い場合に、「聞き手の認識に頼って、または聞き手の前で話し手が自分の認識を確かなものにするときに使われる」と説明している。この性質によって、「ね」は聞き手への確認として機能する。

(22) 粟津組の奥さんですね。はじめておめにかかります。

(陳 1987:97)

陳（1987:97）はこの用法を「念押し」と呼び、話し手が自分の認識よりも聞き手の認識の方が確かだと考えることについて、自分の認識を聞き手の認識と同じ水準に高めようとする時に使われると説明している。念押しは聞き手に確かめるものであり、質問することになるので、「ね」のかわりに「か」を使っても成り立つ。しかし「か」の場合は、話し手の認識の度合いが表現されていない点で「ね」と異なる。「ね」を用いると、話し手もそのことについてある程度認識しているが、より確かな認識者である聞き手に問うことによって認識のギャップを埋めようとしていることを表すという（陳 1987:98）。

また、次のような機能もある。

(23) いい夜だね。

（陳 1987:98）

陳（1987:98）によると、「ね」は（23）のように話し手と聞き手が一緒にいる場面の事柄について話し手が認識した時に、聞き手も同じように認識しているだろうと話し手が考えて発言する場合にも用いられる。つまり、話し手が自分の発言に対して聞き手の同意を得られると期待しているのであり、伊豆原（1993:110）は、この用法を「共有」と呼んでいる。

また、間投詞の「ね」を終助詞の「ね」と関連づけて論じる研究も多く存在する（時枝 1941; 2008:224、林 1983:46 他）。伊豆原（1993:104）は、2つの「ね」の働きを統一的に引き込み・持ちかけ、一体化・共有化、同意・確認と規定している。

(24) 回答者：...ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中に
ちょっとね（はい）洗剤を入れますとね (...)

（伊豆原 1993:104）

(24) のような語末・句末など、文の途中で用いられる間投詞としての「ね」は、「話し手が聞き手の受けを確認する形で話を進める場合に用いられる」という。聞き手との共有を表す「ね」だからこそ、発話の途中で用いて聞き手とのつながりを意識する用法を持つのであろう。

5.2. ¿verdad?及び¿no?と「ね」

では、¿verdad?や ¿no?と「ね」はどのような点において対応しているのだろうか。¿verdad?や ¿no?は、聞き手の発話への情報量を問題にせず、発話内容が真であることを前提に、あるいは否定する余地を残して問うものであり、話し手がどちらの形式を用いるか判断する。一方「ね」は、話し手と聞き手の認識(知識)が一致していることを表し、聞き手の認識に頼って、または聞き手の前で話し手が自分の認識を確かなものにするときに使われる(陳 1987:97)。そのため、これらの機能は本質的には異なっている。しかし、どちらも結果的に聞き手に確認する(スペイン語の場合は、聞き手が答える場合にそういう解釈が生まれる)という点において共通しているので、これまでも対応する表現として扱われてきたのだろう。

では、具体例を通して ¿verdad?及び ¿no?と「ね」を対照してみよう。まず、「ね」の確認(念押し)の機能である。これは話し手が、自分の認識よりも聞き手の認識の方が確かだと考えることについて、自分の認識を聞き手の認識と同じ水準に高めようとする時に使われるものである(陳 1987:97)。

(22)' 粟津組の奥さんですね。はじめておめにかかります。

(陳 1987:97)

スペイン語における聞き手への確認の例として、(11)が挙げられる。

(11)' Santa: Tu mujer está de noche ahora, ¿no?

[José asiente, desconcentrado.]

(*Los lunes al sol* : 51)

(22) は聞き手自身に、また (11) は聞き手の妻に関わることを確認している。聞き手の認識 (知識) に頼ろうとする「ね」と、否定の返答をも許容する態度を示す ¿no? は、どちらも確認の機能を持つ。また、陳 (1987: 97-98) はこの用法において「『か』で置きかえた場合は話し手の認識の度合いが表現されていない点で「ね」と異なる」と述べており、これは (1)a で示した ¿Tu viste tiempo de verla? という疑問文と ¿no? を伴った (1)b Tuviste tiempo de verla, ¿no? とを比較した場合、疑問では話し手は質問の答えを全く知らないのに対して、¿no? が付加されると話し手の確信の度合いが示されるという Ortega (1985: 243) の指摘と共通している。これらは共に確認の機能を果たすが、(22) では聞き手の方が情報量が多いと話し手が判断して「ね」を用いているのに対して、(11) では話し手が聞き手の妻が夜勤であるかについて確信がないので、否定する余地を残す ¿no? を用いるという全く異なるプロセスを経ている。

また、「ね」には先述の (23) 「いい夜だね」のように、聞き手との共有を表す機能もあるが、スペイン語では ¿verdad? や ¿no? を用いて情報の共有を表すことができるのだろうか。母語話者に、話し手と聞き手が一緒に歩いている場面における次の 2 つの発話を提示した。

(25) Hoy hace buen tiempo, ¿verdad?

(26) Hoy hace buen tiempo, ¿no?

Hoy hace buen tiempo. という発話に ¿verdad? を伴うと、話し手は聞き手が同じように考えていると前提して確認しているという。これに対して、¿no? の

場合は「私はそう思うけど、君はどう思う？」というような含意を持つという。これは、¿verdad?が真を前提に問うものであり、¿no?が否定する余地を表すという差がもたらすニュアンスの違いである。日本語の場合、「いい夜だね」の「ね」は疑問形式ではない。一方、スペイン語の場合は疑問形式である ¿verdad?を用いて、聞き手に直接聞こうとする態度を示すものだが、これらの表現はどちらも聞き手が同意することを期待しているという点で一致している。したがって、(23)のような聞き手との共有化を図る場合の「ね」には、¿verdad?が対応すると言える。

このように、スペイン語の ¿verdad?と ¿no?は、プロセスは異なるが、確認や共有を表す点において日本語の「ね」と対応する。Christl (1996:129)の ¿no?の使用によって話し手が聞き手を発話に巻き込もうとすると述べているが、この説明は時枝 (1961:8)の「聞き手を同調者としての立場に置こうする(時枝 1961:8)」という「ね」の記述と一致している。これは、発話内容を否定する余地を残して問う ¿no?が、結果的に話し手の発話に聞き手を引き込み、聞き手との一体感を作り出そうとするためだと考えられる。「ね」は ¿no?とは異なって元々聞き手を意識していることを示すが、結果的にどちらも確認や共有を示す機能を果たすので、このような類似した説明がされるのだろう。

また、文中に現れる「ね」も ¿no?との共通性が窺える。

(24)' 回答者：…ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中に
 ちょっとね (はい) 洗剤を入れますとね (…)

(伊豆原 1993:104)

(19)' Borjamari: No sé, *ossea [sic]*, a lo mejor tengo esa época hiperidealizada, ¿sabes? Pero es que pienso, ¿no?, que a lo mejor el que se casó con Piedad podría haber sido yo.

(*El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo* : 38)

「ね」の場合は、聞き手との共有を表す性質によって、発話の途中で用いて聞き手の受けを確認する機能を果たす。これに対して¿no?は、発話内容を否定する余地を残すことを聞き手に示す性質によって、聞き手とのつながりを示し、聞き手の受けを確認すると考えられ、間投詞の「ね」と¿no?も一致すると言える。

しかし、次のような場合には、¿verdad?及び¿no?と「ね」は対応しない。

(27) 早くしてくださいね。

陳 (1987:100) は、「ね」がはたらきかけの文にも用いられると指摘している。(27) の「ね」を「よ」に置きかえて「早くしてくださいよ」とすると、「ね」を用いるよりも少し厳しい印象を受ける。益岡 (1991:96) によると、「よ」は話し手と聞き手の知識の間にずれがある場合に用いられるので、「早くしてくださいよ」という発話は、「よ」によって聞き手が急ぐことが聞き手にとって必要なことであると話し手が考え、その必要性を聞き手にも認識させる目的で発話をしていることになる。そのため、聞き手に教えてやろうという話し手の態度が表明され、厳しい印象を与えるのである。しかし陳 (1987:100) によると、「ね」の場合には話し手が聞き手も自分が急ぐべきことを認識していると考えており、その上で話し手の発話に同意を得られることを期待して発言しているのだという。したがって、(27) は「よ」よりも「ね」を用いた方がやわらかく感じられると言える。

しかし、益岡 (1991:100) は『「ね」は話し手と聞き手の意向が一致すると判断を表すため、話し手の一方的な情報伝達で、聞き手の意向に反して行為を要求する命令の性質とは合わない』と指摘している。実際に、(27) を (28) のような直接的な命令の形式にすると、「ね」は不適切になる。

(28) *早くしろね。

では、なぜ(27)は「ね」を伴うことができるのだろうか。この理由について、滝浦(2008:136)は「早くして(ください)ね」という形式は、話し手の意思に聞き手の意思を沿わせることを意図する「依頼」なので、「ね」を伴うことができると説明している。これに対して、命令とは「話し手の意思を一方的に実現することを意図する言語行為である」(滝浦 2008:136)ので、聞き手を意識する含意を持つ「ね」は付加されないのだという。したがって、日本語では典型的な命令は聞き手を重視する「ね」を伴わないと言えるだろう。

他方、スペイン語の場合も ¿verdad?は命令文とは現れない(Ortega 1985:247)。その点において ¿verdad?と「ね」は一致しているが、¿verdad?が命令とは用いられないのは、その性質が発話内容が真であることを前提に問うためであり、「ね」とは理由が異なっている。しかし、¿no?は命令にも付加することができ、発話内容を否定する余地を残して問うことによって、聞き手の意見を聞こうとする姿勢を表す。では、(27)のような依頼の場合はどうだろうか。¿verdad?と ¿no?は話し手が発話内容について真を前提に、あるいは否定する余地を残して問うものであり、これらには聞き手の存在を意識するという要素はなく、日本語の「ね」とは根本的に異なる。したがって、(27)のような動機で依頼に伴うことはないと考えられる。では、この点について検証してみよう。スペイン語における依頼形式の1つに、次のような疑問文がある。

(29) ¿Por qué no vienes a ayudarme mañana?

この発話に ¿verdad?と ¿no?を付加して母語話者に提示し、意見を求めた。

(30) *¿Por qué no vienes a ayudarme mañana, verdad / no?

その結果、(30) は ¿verdad? と ¿no? 共に不自然であるという回答が得られた。依頼は、話し手の意思に聞き手の意思を沿わせることを意図するものであり(滝浦 2008:136)、¿verdad? を伴って、依頼の発話内容が真であることを前提して問うことができないので不自然なのだと説明できる。また ¿no? は、聞き手が発話内容を否定する余地があることを示して問うものであるが、これまでも述べてきたように、¿no? は質問ではなく主張としての性質を持つ。依頼は、命令と比べて行為遂行の強要度が低く、遂行するかどうかを聞き手に任せるものである。これが話し手の主張という性質を持つ ¿no? とは合わないのだろう。

では、他の依頼形式はどうだろうか。

(31) ¿Puedes venir mañana?

(32) ¿Quieres venir mañana?

これらの発話に ¿verdad? と ¿no? を付加して母語話者に提示し、意見を求めた。

(33) ¿Puedes venir mañana, verdad / no?

(34) ¿Quieres venir mañana, verdad / no?

(31)、(32) は依頼文だが、¿verdad? や ¿no? を付加すると、単なる疑問文になってしまう。母語話者によると (33)、(34) は、話し手は聞き手が明日来れることを聞き、それを確認しているような印象を受け、¿verdad? の場合には来ることを前提にして、¿no? は来ることができない可能性も含めているという。このことから、¿verdad? や ¿no? が依頼に伴っても (27) のように、聞き手の同意が得られることを期待していることを示したり、発話の和らげとしては機能しないことがわかる。したがって、¿verdad? や ¿no? は、「ね」の確認や共有と

いった機能には対応するが、性質の相違によって、完全には一致しないと言えるだろう。

6. まとめと今後の課題

¿verdad?は、発話内容が真であることを前提に問う姿勢を見せる性質を持ち、¿no?は、聞き手が発話内容を否定する余地を残して問う姿勢を見せる性質を持つ。これらは、それぞれの語彙の意味を反映したものであると言える。この性質によって、¿verdad?は副次的に発話内容に対する確信度の高さを表明し、¿no?はその低さを表明する。一方、「ね」は発話内容に関する聞き手の認識(知識)が、話し手と一致していること、あるいは話し手よりも上回っていることを示すものである。すなわち、これら3形式は、聞き手に対して発話内容を確認しようとする点において一致しているのだが、そのプロセスが異なっているのである。

また、¿no?と「ね」は、発話緩和という副次的機能を持っていることが明らかになった。¿no?は聞き手に否定される余地があることを示すことによって、「ね」は聞き手と情報を共有していることを示すことによって発話を和らげることができる。しかし、¿verdad?は真を前提に問うものなので、この機能を果たすことはできない。

しかし、行為指示に伴う場合など一部の用法についてはこれら3形式の機能は対応しない。これは、¿verdad?と¿no?が話し手の発話内容に対する判断を表明するものであり、「ね」が聞き手と情報との関係を結びつけるという、それぞれの本質が異なることが原因である。

さらに、文中の¿no?は聞き手の反応を伺おうとするので、受けの確認の機能を持つ文中の「ね」にうまく対応する。

これまでの議論をまとめ、¿verdad?及び¿no?と「ね」の機能の対応関係を、表1に示す。その機能を持つものを○、持たないものを×で表示する。

表1 ¿verdad?及び¿no?と「ね」の機能

			¿verdad?	¿no?	ね	
性質			真を前提にして問う姿勢を見せる	否定する余地を残して問う姿勢を見せる	話し手と聞き手の認識(知識)の一致	
的	文中	受けの確認		○	○	
	文末	発話確認	確信度の表明	○ 高い	○ 低い	×
		情報の共有	×	×	○	
		発話緩和	×	○	○	

¿no?と「ね」は、文中で聞き手の受けを確認する点において一致する。¿no?は聞き手が否定する余地を残す性質によって聞き手とのつながりを示して、「ね」は聞き手との共有を表す性質によってこの機能を果たす。しかし¿verdad?は、発話内容が真であることを前提に問うので、聞き手の反応を窺うのには適さず、この機能を持たない。

また、文末において¿verdad?及び¿no?と「ね」は発話の確認として機能する。¿verdad?と¿no?は、前者は発話内容が真であることを前提し、後者は聞き手が否定する余地を残して問うという性質によって、副次的に確信度の高低を表明する。一方、「ね」は話し手と聞き手の認識(知識)が一致していることを表す性質を持ち、聞き手との情報の共有を表明するものであり、本質的には異なる。すなわち、これら3形式は、発話確認というレベルでは共通しているので、翻訳として対応させることが可能であるが、その本質は、スペイン語では、話し手が発話内容をどのような姿勢で伝達しようとしているかを表すものであるのに対して、日本語では、聞き手との情報の共有の表明という意味機能をもつ文法手段なのである。

これらの形式の選択基準は、¿verdad?と¿no?の場合、話し手の発話内容に対する態度であり、「ね」は、聞き手との情報の一致や情報量の相対的な差である。太田(1992:98)が、日本語とスペイン語の談話場における特徴について、

日本語は常に聞き手を意識し、スペイン語は話し手の視点を保持する、と指摘しているように、¿verdad?及び ¿no?と「ね」の本質的な違いは、このような類型論的なそれぞれの言語の特徴につながっていると言えるだろう。

今後の課題として、¿no?が行為指示に付加された場合の機能の解明を挙げる。Ortega (1985: 244, 245) は、¿no?が命令に伴う場合には命令を和らげ、聞き手に答えの自由を与えると記述し、次のような例を挙げている。

(35) ¡Cómete la comida!, ¿no?

(36) ¡Ten un poco de paciencia!, ¿no?

(Ortega 1985: 244)

しかしある母語話者によると、(35) と (36) はどちらも ¿no?によって「命令内容を受け入れるよう求めている印象を受ける」という。これは先の (14)b Levántate, ¿no?や (15)b No te levantes, ¿no?の例と同様に、否定する余地を残す ¿no?を用いて聞き手に問うことによって、聞き手を非難したり命令内容の遂行を促すためである。このような場合、¿no?は命令の和らげではなく、強めとして機能していると考えられる。だが (13) Que suban, ¿no?については、「聞き手と一緒に決めている印象を受ける」という回答が得られており、この例においては ¿no?は和らげとして機能していると言えるだろう。(13) は間接命令の例であり、本稿のデータではこの点を考察するための他の例は得られなかった。したがって、(35) や (36) のような典型的な命令に ¿no?を伴った場合、果たして Ortega (1985: 245) の言うように命令を和らげることができるのかについては、今後も考察をしていく必要があるだろう。

註

1) phatic communion (Malinowski 1923; 1949: 315)、「自由で目的のない社会的交際

で使用される言葉（宇佐美 1999: 84)」。

- 2) この場合の文中とは、主節と従属節の間をコンマで区切っている例を指す。
- 3) 資料に映画の脚本を用いたのは、映画では発話場面が映し出され、かつ一人芝居（独白）が少ないので、小説や演劇における発話と比べるとより自然な会話であり、¿verdad?や¿no?が頻繁に現れると考えられるためである。なお、時代や地域によって差があると考えられるので、比較的新しく、方言があまり現れないようなスペインの映画脚本を資料に選んだ。このデータは、まず脚本に現れている¿verdad?や¿no?の例数を数え、さらに実際に映像を確認して、俳優がアドリブで用いた表現も数に含めた。脚本に現れている¿verdad?や¿no?が、映像では省略されている場合もあったが、脚本に書かれているということは脚本家がある場面において自然である、必要であると判断していると考えられるので、映像で省略されていても脚本にある表現については例数に含めている。
- 4) スペイン語母語話者（スペイン人男性3名、女性2名）に対して、それぞれの例において¿verdad?や¿no?を伴わない場合に発話の意味が変わるか、また¿verdad?の例は¿no?に、¿no?の例は¿verdad?に置きかえるとどのように意味が変化するかを訊ねた。
- 5) 命令のもう1例は *Ossea [sic], estate quieto, mmmm, ¿no?* というものであり、母語話者によると gente pija と呼ばれる一部の人達（お高くとまっている人たち）が使う特殊な話し方だということなので、考察から除いた。

参考文献

- Briz Gómez, Antonio (1998) *El español coloquial en la conversación. Esbozo de pragmatogramática*, Ariel, Barcelona.
- Christl, Joachim (1996) “Muletillas en el español hablado”, Thomas Kotschi *et al.* (eds.), *El español hablado y la cultura oral en España e Hispanoamérica*, Vervuert Iberoamericana, Frankfurt, Madrid, pp. 117–146.
- Fuentes Rodríguez, Catalina (1985) “Apéndices con valor apelativo”, P. Carbonero y M. T. Paletm (eds.), *Sociolingüística andaluza* 5, Universidad de Sevilla, Sevilla, pp. 171–196.

- García, María José (2005) “El uso de los apéndices modalizadores ¿no? y ¿eh? en español peninsular”, L. Sayahi y M. Westmoreland (eds.), *Selected Proceedings of the First Workshop on Spanish Sociolinguistics*, Somerville, MA, Casdilla Proceedings Project, pp.89–101.
- Malinowski, Bronislaw (1923; 1949) “The problem of meaning in primitive languages”, C. K. Ogden and I. A. Richards (eds.), *The Meaning of Meaning*, Routledge & Legan Paul, London, pp. 296–336.
- Ortega Olivares, Jenaro (1985) “Apéndices modalizadores en español: Los ‘comprobativos’”, *Estudios románicos dedicados al profesor Andrés Soria Ortega I*, Universidad de Granada, Granada, pp.239–255.
- Rodríguez Muñoz, Francisco J. (2009) “Estudios sobre las funciones pragmadiscursivas de ¿no? y ¿eh? en el español hablado”, *Revista de Lingüística Teórica y Aplicada* 47 (1), Universidad de Concepción, Concepción, pp.83–101.
- 陳常好 (1987) 「終助詞－話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞」, 『日本語学』6. 10., 明治書院, 東京, pp.93–109.
- 長谷川信弥 (2011) 『日本語から考える！スペイン語の表現』, 白水社, 東京.
- 林四郎 (1983; 1992) 「日本語の文の形と姿勢」, 『談話の研究と教育 I』, 国立国語研究所, 東京, pp.43–62.
- 伊豆原英子 (1993) 「『ね』と『よ』再考－「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から－」, 『日本語教育』80, 日本語教育学会, 東京, pp.103–115.
- 亀井孝 他 (1996) 『言語学大辞典』, 三省堂, 東京.
- 古浦敏生 (1993) 「イタリア語の付加疑問とそれに対応する日本語の文末部」, 『言語類型論と文末詞』, 三弥井書店, 東京, pp.21–31.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版, 東京.
- 太田亨 (1992) 「日本語とスペイン語の『談話場』の特徴」, 『日本語教育』77, 日本語教育学会, 東京, pp.89–102.
- 野村明衣 (2014) 「スペイン語における情報伝達の方策－スペイン語間投詞と日本語終助詞に関する対照分析－」, 博士論文, 神戸市外国語大学.
- (2015) 「スペイン語の呼びかけ語 hijo/a, chico/a について」, 『HISPÁNICA』第59号, 日本イスパニヤ学会, 東京, pp.39–59.

- (2016 掲載予定) 「呼びかけ語としての *hombre, mujer* について－文末における用法を中心に－」, 『HISPÁNICA』第60号, 日本イスパニヤ学会。
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』, 研究社, 東京。
- 時枝誠記 (1941; 2008) 『国語学原論 続編』, 岩波書店, 東京。
- (1951) 「対人関係を構成する助詞・助動詞」, 『國語國文』20.9., 東京, pp.1-10.
- 宇佐美まゆみ (1999) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」, 『國文學 日本語 日本文学 日本文化 解釈と教材の研究』44.6., 學燈社, 東京, pp.83-89.
- 和佐敦子 (2005) 『スペイン語と日本語のモダリティ』, くろしお出版, 東京。

資料

- Almodóvar, Pedro (2002) *Hable con ella*, Ocho y Medio, Madrid.
- (2006) *Volver*, Ocho y Medio, Madrid.
- Amenábar, Alejandro y Mateo Gil (2004) *Mar adentro*, Ocho y Medio, Madrid.
- Azcona, Rafael (1999) *La lengua de las mariposas*, Ocho y Medio, Madrid.
- Azcona, Rafael y José Luis Cuerda (2008) *Los girasoles ciegos*, Ocho y Medio, Madrid.
- Balaguer, Javier y Álvaro García Mohedano (2001) *Solo Mía*, Ocho y Medio, Madrid.
- Berger, Pablo (2002) *Torremolinos 73*, Ocho y Medio, Madrid.
- Bollaín, Iciar y Alicia Luna (2003) *Te doy mis ojos*, Ocho y Medio, Madrid.
- Cavestany, Juan y Enrique López Lavigne (2004) *El asombroso mundo de Borjamari y Pocholo*, Ocho y Medio, Madrid.
- Chavarrías, Antonio (2007) *Las vidas de Celia*, Ocho y Medio, Madrid.
- Gutiérrez, Chus y Juan Carlos Rubio (2005) *El Calentito*, Ocho y Medio, Madrid.
- Hidalgo, Manuel y Felipe Vega (2004) *Nubes de verano*, Ocho y Medio, Madrid.
- León de Aranoa, Fernando y Ignacio del Moral (2002) *Los lunes al sol*, Ocho y Medio, Madrid.
- Lindo, Elvira y Miguel Albaladejo (2003) *Manolito Gafotas*, Ocho y Medio, Madrid.
- Mañas, Achero (2003) *Noviembre*, Ocho y Medio, Madrid.
- Querejeta, Gracia y David Planell (2004) *Héctor*, Ocho y Medio, Madrid.
- Santiago, Roberto (2005) *El penalti más largo del mundo*, Ocho y Medio, Madrid.

Soler, Antonio (2006) *El camino de los ingleses*, Ocho y Medio, Madrid.

Toro, Guillermo del (2006) *El laberinto del fauno*, Ocho y Medio, Madrid.

Urbizu, Enrique y Michel Gaztambide (2007) *La caja 507*, Ocho y Medio, Madrid.